

# イコンを求めて

牛島 義友

先年ロシアを旅行した時の最大の願いはイコンのふるさとを訪ねる事であった。

イコンはキリストや聖母マリアの姿や聖書の話を分り易く描いたものであり、その稚拙な表現の中にも必ず何かを強く語りかけるもので、児童画のすばらしさと相通するものがあるが、イコンには独創性よりも人物や説話には必ずシンボリカルな意味があり、はつきり何かを語りかける。幼なき日に日曜学校などで聞かされた教えが忠実に形象化されている。中世の人達の信仰心に強く引きつけられて来る。イタリーの古寺巡礼に於ても私にとっては古いフレスコ画やモザイク、特にラヴェンナやシンチー島のモンレアーレ教会のモザイク壁画には最も強く引かれた。

ルネッサンス以後の絵画もすばらしいが、ロマネスクやゴシックの絵画彫刻には素朴な信仰心が共鳴し合って去るにしのびない思いがあった。

これらの絵にはスペイン風のロマネスク、ビザンチン風のモザイクや彫刻に興味があった。ロシアを旅する事によって、ビザンチンの源流にふれる期待で心が高鳴っていた。普通のソ連の観光旅行では出来ないが、その旅行では正教会との交流であったために、多くの教会、修道院を訪問する事が出来た。どこの教会でも立派なイコンが信徒と内陣とのその障壁に掲げられ、又聖母子像のために特に蠟燭を捧げて礼拝するようになっていた。

これらのイコンはすべて「聖」の世界を物語っている。たとえば教会にはそれぞれ名称がある訳であるが、それは文字で書かれておらず、教会の正門の扉の上に掲げられているイコンを見れば分るようになっていた。たとえば大天使ミカエルの像があれば「ミカエル教会」であり、マリアの像なら「マリア教会」であるが、聖マリアが両手を上に挙げ、又は下に下げている場合は「お守りのマリア様」の意味である。すなわち昇天後のマリアを意味する。日本で云えば聖三一教会と云う場合にはアブラハムがもてなしている三人の天使の姿が描かれている。これのもっともすぐれたものはモスクワ・トレチャコフ国立美術館に移されているが（アンドレイ・ルブリョフ描く）この三人の姿が三位一体を現わす。ヨーロッパの教会で三位一体を現わす時は、父（神）と子（キリスト）と聖霊（鳩）を上下に配する画が普通であるが、ここでは三人の天使でそれを現わす。旧約聖書の中でアブラハムを訪ねた旅人を「天の使い」とは書かず、「神の人」と書いてあり、この三人が父と

子と聖霊を現わしている。

また主日には教会暦を通じて色々の日が定められているが、私達が訪れた教会では、三位一体主日に当たっていたので、司祭達が礼拝する所に小さなこの三位一体の像が草花でふちどりして特別に安置されていた。洗礼者・ヨハネを現わす時には大きな皿の上に人の首だけが描かれておりぞっとした。これは皆イコンの約束事のようなものである。また内陣との境のイコン壁には扉があるが、これはどこでも皆ミカエルの像であり、彼の劔によって守護されている事を示す。

マリアの十字架の像の彫刻も多いが、しばしば胸から血がほとばしり出ており、足下には必らずされこうべが置かれている。これはキリストが十字架にかけられたのは、ゴルゴタの丘（されこうべの丘）であるからで、又それだけでなく人類の祖であるアダムを象徴している。すなわちアダムの犯した誤ち、人類の原罪はキリストの血により贖なわれたことを物語っている。ローマ教会などで見慣れた十字架上のキリストの像とは異なる。

このキリストはまた苦しみの像と云うより正面を向き眼を大きく開いた栄光のキリストもあるし、また十字架につけられた捨てられたヨローロッパではピラトがユダヤ人の不当な要求に反撥して「ナザレのイエス・ユダヤ人の王」(Jesus Nazareus Rex Iudaeorum)と書かせ、略して INRI が普通であり、この形式はきまりかと思っていたが、ロシアでは三番目の R が B であったり、ロシア語の ツァー であった。これは R はラテン語であるが、B はギリシャ語のバリストアー、ツァーはロシア語の「王」を意味する由で、考えてみればこ

の文字が原型に近いのかもしれない。

このようなさまざまな宗教的教義がイコンを見ることによって教えられた。

すなわち絵画と文字とが完全に融合し、文盲の人の多かった中世には便法であったし、今日の映像の時代から見直せば新しい行き方を教えているかもしれない。

また教会の礼拝は、肉声によるすぐれた和音音楽であるので、音楽を聞きながらテレビを見る今日の生活を先取りしていた、とも云えようか。

私が特に親しみを持つのは十五・六世紀の家庭祭壇用の小形のイコンであるが、これらは古美術品として扱われており、教会の中でも数多く見ることは出来なかった。セルギウス師の始めたザボルスク大修道院にはこのような古いイコンの蒐集があったが、写真も撮らせてくれなかった。実際に教会の中にあるものはもっと大形で新しい物であり、もっぱら礼拝用に安置されておる。銀細工によりふち取りされたマリア像も多いが、これには余り感心しなかった。新しいものは写實的に、而も美しく描かれており、引き伸ばされた色彩写真のような感じのするもので、美しくはあるが、宗教心をかきたてるものとは云えない。正直に云うとこの傾向を見て失望し、中世への回帰がますます強められた。

児童画が幼児期に於ては魅力的であるが、小学上級生になるほどつまらなくなつて来るのと似ている感じがした。